令和７年度

深江城崎遺跡２次調査現地説明会資料

深江城崎遺跡2次調査から出土した舟と背負梯子（しょいご）

日時

令和７年 12 月 13 日（土）10:00～13:00

場所

糸島市二丈深江８丁目 1827-2 番地（深江城崎遺跡２次調査）

糸島市地域振興部文化課

１．はじめに

深江地区遺跡群は、糸島地域の西側に位置する拠点集落で、弥生時代後期には朝鮮半島から先進文化を受け入れる交易の窓口として機能していました。宅地造成に伴い、令和２年度から調査を開始しました。これまで深江城崎遺跡１次調査、深江石町遺跡１次、２次調査の３年に渡る調査を行い、現在、発掘調査を行っている深江城崎遺跡２次調査をもって一連の調査が終了します。

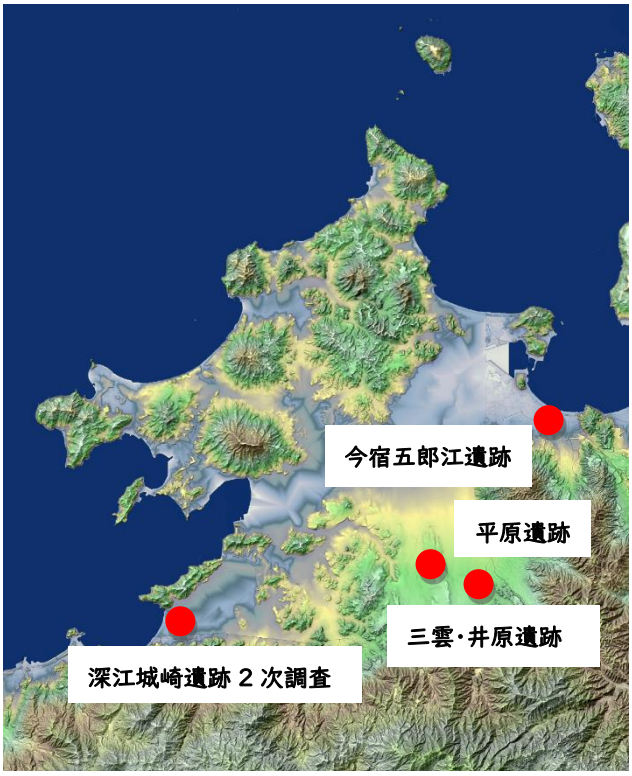
平成 2～3 年度に行われた深江井牟田遺跡では、楽浪系土器が出土したことから、深江地区遺跡群は、「伊都国」西部の交易拠点として注目されていました。今回の調査は、令和7年7月から開始し、発掘調査の途中ではありますが、遺跡に触れていただく機会として、現地説明会を開催します。

２．遺跡の環境

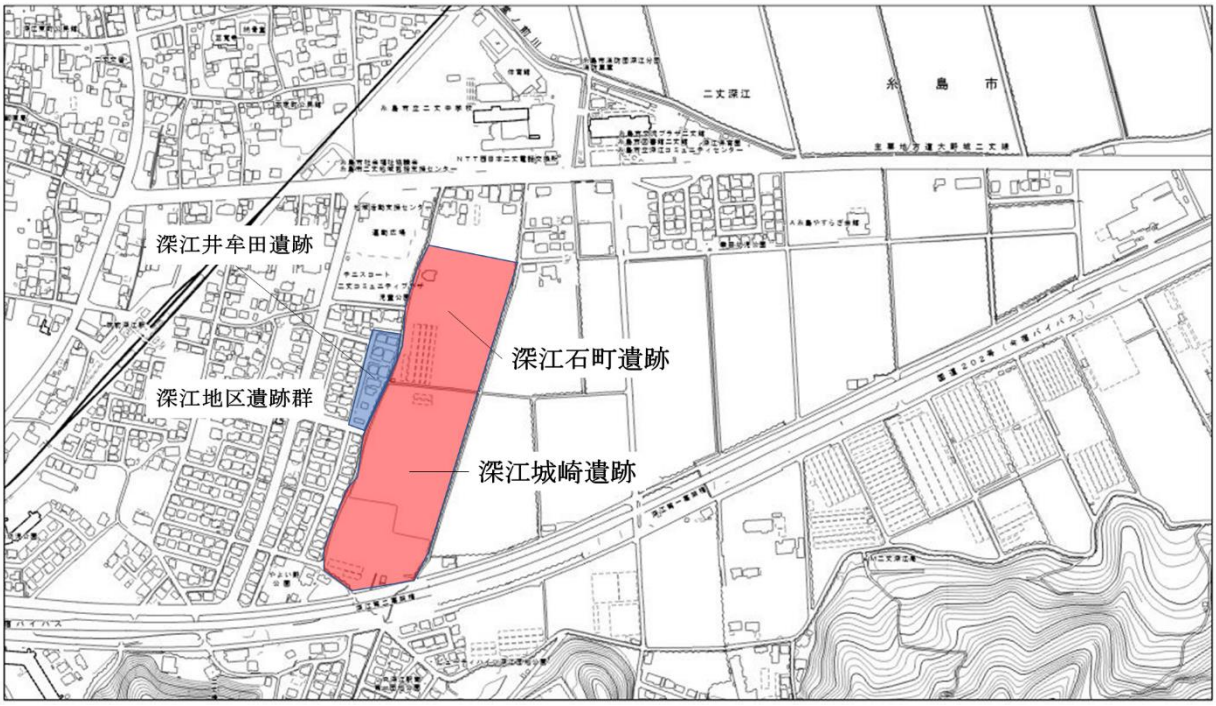
遺跡が立地する深江平野は、一貴山川、羅漢川、柳川によって形成された沖積地で、海浜部には縄文海進時の海岸線に沿って砂丘が形成されています。深江城崎・石町遺跡を含む深江地区遺跡群は、この砂丘上に立地し、この砂丘間には低湿地があることが分かっています。

これまでの調査としては、平成 2～3 年度に行われた深江井牟田遺跡で、楽浪系土器が出土したことから、「伊都国」西部の港湾集落の可能性が指摘されてきました。

令和２年度から実施した、宅地造成に伴う発掘調査では、クジラを描いた絵画土器（深江城崎遺跡１次調査）、木製短甲（深江石町遺跡１次調査）、漢式櫛（深江石町遺跡２次調査）など、低湿地から重要な遺物が出土しました。また、楽浪系土器や国内各地（東九州、瀬戸内など）の土器、木製容器や農具、建築材が出土するなど、発掘調査を進めるにつれ、遺跡の重要性が高まっています。



第１図　深江城崎遺跡２次調査と主要遺跡



第２図　深江地区遺跡群位置図①

３．深江城崎遺跡２次調査の成果

深江城崎遺跡2次調査は、宅地造成に伴い実施する発掘調査で、永久構造物である道路部分のみを発掘の対象としています。砂丘上にある居住域とその東にある後背湿地を調査しています。居住域では、掘立柱建物の柱穴が確認され、軟弱地盤であるため、穴の底には柱の沈下を防ぐための礎板が確認されました。

一方、湿地帯では、弥生時代中期後半から終末期にかけての土器のほか、木器が大量に出土しました。各時期の特徴は次のとおりです。

【弥生時代後期後半～終末期】

土器が広範囲で出土していますが、完形のものは多くはありません。その分布は集落に近い西側に多く、東に向かって少なくなる傾向にあります。楽浪系土器や東九州系、瀬戸内系の土器も出土しています。この時期には湿地帯は窪地化したものと考えられます。

【弥生時代後期前半】

この時期には、部分的に砂層の堆積が確認され、一時、洪水などの大量の水が湿地帯に入り込んだ可能性があります。土器は広範囲に確認されると共に、流木に混じり、漁労具（タモ、アカトリ）、農具（竪杵、横槌など）、運搬具（舟、背負梯子）など多くの木

製品が出土しています。また、調査区東側で出土した舟は、長さ 1.96m、幅 55cmの刳抜式の舟ですが、舟内やその周辺でも完形の土器が出土しています。このような状況から、舟に土器を載せて水辺に沈めるような祭祀が行われていた可能性があります。さらに、これら木器が埋没した後、板材、加工材の残欠が入る土坑が掘られており、木器埋没後も木器製作は継続したものと考えられます。

一方、調査区南側では、同じ時期に砂丘に沿って人工流路が造られ、杭や矢板を用いて護岸しています。この流路は、北東側から南西側に向かって下がっており、その性格については検証する必要があります。

【弥生時代中期末～後期初頭】

低湿地でも砂丘に近い場所で、完形の土器が集中して出土します。この土器群の中には丹塗磨研土器が含まれるため、水辺での祭祀が行われたものと推定しています。

【弥生時代中期後半】

過去の調査では、植物遺存層（バフン層）にあたり、方形土坑の中から木器製作に関係する素材や板材、残欠などが出土しています。今回の調査では、現地説明会終了後に調査を実施する予定です。

●主な出土遺物

【土器】内面朱付着土器、外来系土器（吉備系か）

【石器】石錘、石包丁、紡錘車

【木器】漁労具：タモ、アカトリ

農　具：竪杵、横杵、

運搬具：背負梯子、舟

容　器：朝鮮半島系筒形容器（底板）

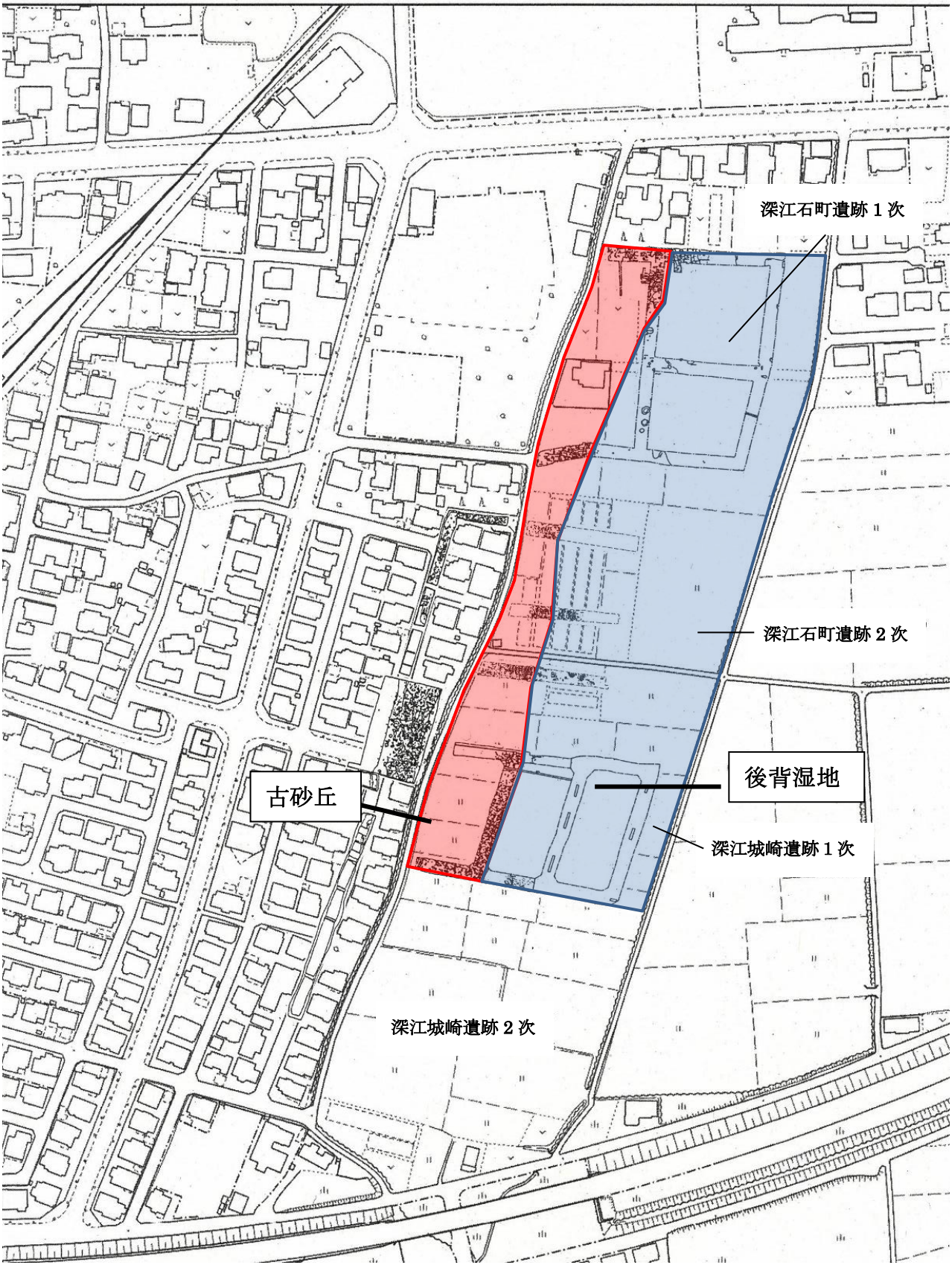
武　器：木鏃

建築材：柱、ネズミ返し

４．まとめ

これまで 4 年間にわたる発掘調査で、低湿地で出土した土器は、深江地区遺跡群における集落の存続期間に対応すると考えられます。また、弥生時代後期前半の段階では、地下水位が高い低湿地を利用した人工流路や木器製作に関連する土坑が検出され、遺跡の南にある背振山系の豊富な森林資源を背景に、木器製作が盛んに行われていたことが明らかとなりました。

また、国内外の土器（楽浪系土器、東九州～瀬戸内）や半島系筒形容器の出土は、対外交易の拠点であることを示しています。これらの出土品は、弥生時代後半期の「伊都国」の様相を知る上で重要な成果と言えます。



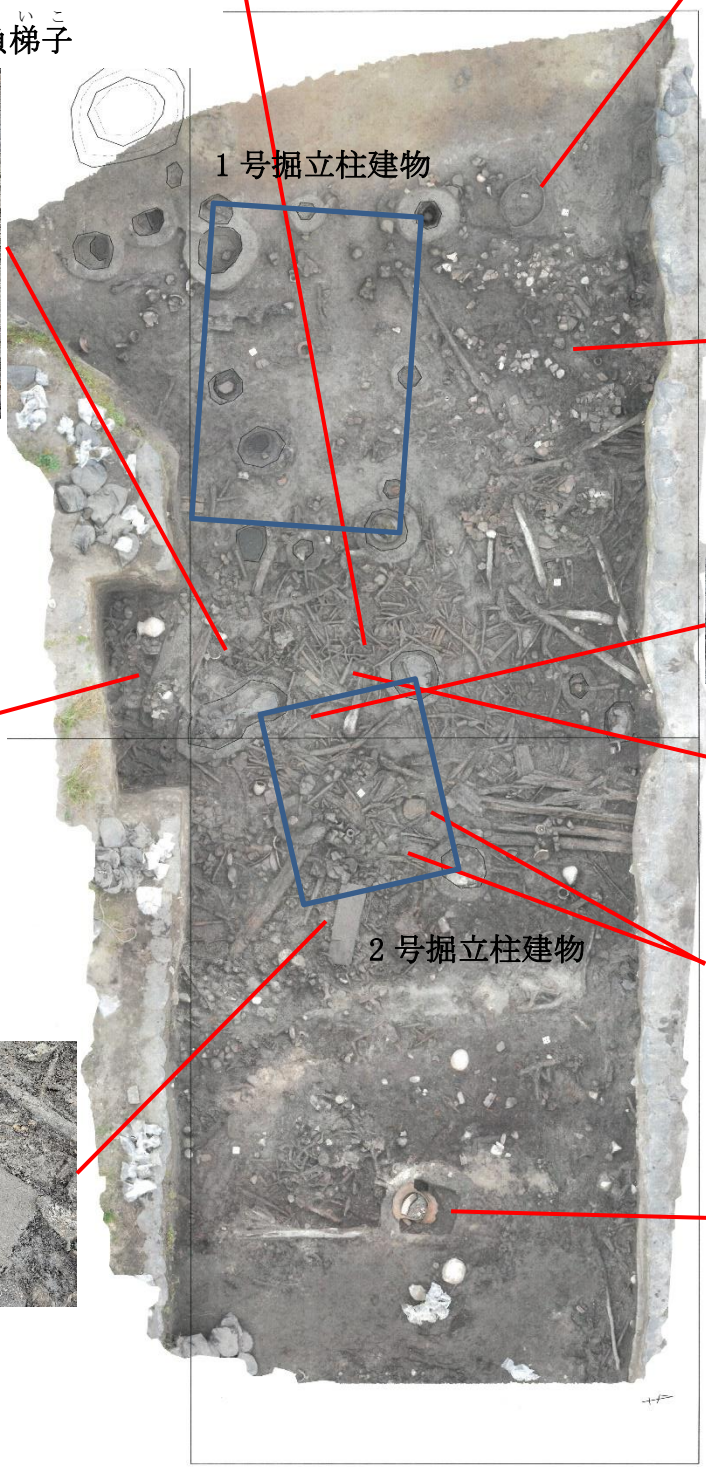
第３図　深江地区遺跡群位置図②（1/2,500）

背負梯子

背負梯子

舟

扉材？



タモ

アカトリ

背負梯子

竪杵

竪杵と木製円盤

糸島型大形壺

第４図　深江城崎遺跡２次調査Ⅰ区全体オルソ図

写真１　深江城崎遺跡２次調査遺物出土状況（第２面）

写真２　舟・背負梯子出土状況

写真３　背負梯子出土状況

写真４　内面朱付着土器
（深江城崎遺跡２次）

写真５　朝鮮半島系筒型容器（底板）
（深江城崎遺跡２次）

写真６　朝鮮半島系筒型容器（蓋）
（深江石町遺跡２次）

写真７　外来系器台
（深江城崎遺跡Ⅰ次）

写真８　クジラを線刻した絵画土器（深江城崎遺跡Ⅰ次）

写真９　木製短甲出土状況（深江石町遺跡Ⅰ次）

木甲(後胴表)

木甲(後胴表)

木甲(前胴右表)

木甲(前胴右裏)

木甲(前胴左表)

木甲(前胴左裏)

写真１０　木製短甲未成品（深江石町遺跡１次）

写真１１　木製短甲製作時の残欠
（深江石町遺跡１次）

第５図　木製短甲復元図

写真１２　１号土坑木器出土状況と漢式櫛（深江石町遺跡２次調査）

写真１３　漢式櫛（深江石町遺跡２次調査）

【用語解説】

楽浪郡：漢の武帝が朝鮮半島に置いた直轄地である四郡の一つ。現在の平城付近に置かれ、漢・後漢・魏・晋の各王朝の朝鮮支配の拠点とされた。

土坑：ある程度の大きさと深さを持った掘り込みのこと

アカトリ（淦取）：船底にたまった水を取り去るための排水具

後背湿地：氾濫した河川が形成した自然堤防（微高地）の裏側にできる水はけの悪い（帯水している）低湿地帯のこと

内面朱付着土器：朱の原料である辰砂を加熱して、朱を精製する専用の容器と考えられているもの

紡錘車：糸を紡ぐ道具で、中央に穴のある車を回転させながら繊維に撚りをかけ、穴に通した軸にまきとっていく。穴の開いた車部分が出土することが多い

深江城崎遺跡2次調査現地説明会資料

令和7（2025）年 12 月 13 日

作成　糸島市地域振興部文化課
福岡県糸島市前原西一丁目1番1号
TEL 092−332−2093